

本当に縄文時代観は変わったのか？

岡村道雄*

文化庁記念物課と言うところにおります岡村と言います。記念物課といいますとあまり耳慣れないと思いますが、私の課では遺跡・史跡と名勝と天然記念物の3つを扱っています。秋田県で言えば教育庁の文化課が文化財を担当しているのと同じです。その中でも私は遺跡のことをやっています。今、全国で遺跡はだいたい37万箇所あるということになっていて、そこで年間に大体1万件ぐらい発掘調査をしています。その発掘調査に1,200億円かかっている、他と比較すると文部省が大学等の研究者に出す科学研究費のトータルが1,000億円ぐらいです。一年間で使う額ですから大変な額だと思います。それで、その1万件の発掘調査を地方自治体や財団法人に属する専門の職員の人たちが実施するわけですが、全国に去年5月の統計で6,250人ほどおられます。そういった非常に大所帯の全国の埋文行政になってますが、国には私を含めて5人調査官がおり、この5人だけで全国の遺跡を担当しています。その中で私が一応まとめ役ということです。全国で起きてくる毎年の問題点等をひとつひとつ解決していくというようなこと、あるいは大きな埋文行政の仕組みを作っていくといった仕事をしています。この分野の本格的な行政の歴史が30年くらいしかありませんし、これから21世紀に向けて行政的に洗練された新たな仕組みを考えていかなければいけない。そういった大きな転換期にもきていると思います。そんな中で日頃は大体年間80日を少し超えるぐらいの出張をしています。今日のような講演は出張ではなく、出張届けを出して公務で行く出張が80日ぐらいです。ですから昼間は円滑な行政発掘、開発の事前調査の実施と、遺跡をどうやって守っていくかといった仕事をしています。昼間は役人の顔をして、今年で10年になりましたが、背広が似合ってきたでしょうか。今日は、そういった役人稼業を離れて、本当に縄文時代観は変わったのか？といったことを、私の夜の生活、夜の生活と言ったら何となく変な感じですが、私は大体夜と土日は比較的遊べます。夜の趣味をきちっとしていないと昼間イライラします。電話もしょっちゅう鳴るし、1日に大体1~3組ずつ全国から来るお客様に対して、こうしたらいんじゃないかとアドバイスしたり、あるいは毎日のように会議を開いています。そんなイライラの時間の中で、夜はただ勉強すれば何かが分かるという非常に単純でわかりやすい学問の世界、これは本当にありがたい世界です。何か勉強すれば必ず何かが分かるという、そんな中に夜は逃げ込んで少しづつ勉強しています。

今日は、本当に縄文時代観は変わったのかというテーマにしたんですが、これはどう言うことかと言いますと、三内丸山が調査されてはじめて大変な遺跡が見つかったかのような宣伝のされかたをする。三内丸山遺跡をきっかけにドンドン東北の縄文の事を分かってもらって、これをきっかけにさらに東北・北海道にある、あるいは東日本にある縄文時代の事を、あるいはもっと広く言えば遺跡のことが広く皆様に分かっている、そのきっかけだということで縄文時代観は変わった変わったと私も一緒になって騒いでいます。東京にいて10年になります。宮城県に居た時はしょっちゅうテレビ

*文化庁記念物課主任文化財調査官

に出ていましたが、東京に来て私はテレビに出る顔じゃないし、ずっと出ませんでした。それが、10年目になってこれは大いに宣伝する時期だと思ひまして去年は相当テレビに出ました。それもこれも埋蔵文化財・遺跡を通して世の中の役に立つ、そういった部分を出来るだけ拡大したいと思ったからなんです、そういう意味で縄文観は変わったと言っています。本心から言ってもやっぱり変わったと思います。今日はどんな部分が、どんな風に変ったのか、変わった部分をかいつまんでお話ししたいと思います。ただ本当に三内丸山で変わったかと問われますと、それはそうじゃない。やはり10年くらいの間にいろいろな事が分かってきまして、そして三内丸山が5haという広さ、非常に広い範囲を掘って遺跡の広がり分かってきた。いろいろ珍しい要素があつた遺跡の中に集約的にあつたと言うことだろうと思います。決して三内丸山だけで変わったのではなくて、50年前からのいろいろな発見が積み重なって、大きく縄文時代観が変わったと言うよりも、解明が進んできて分かるようになってきたのだと思います。私はそもそも東北地方、仙台周辺で20年間住んでいました。小学校3年の頃から、考古ボーイというか裏山で遺跡を掘って楽しんでいました。きちんと勉強をはじめたのは仙台に行ってから20年間なんです、その間は大体旧石器時代の研究をやってきました。私の師匠は芹沢長介と言う人ですが、芹沢先生は縄文時代の研究家だと思っていました。私は新潟の上越生まれですが、上越の図書館に3冊だけ考古学の本があつて、その中の1冊が芹沢先生が書いた『石器時代の日本』でして、そのほとんどが縄文の事を書いています。東北大に行けば芹沢先生のもとで縄文の事が学べると思ひて入学したんです。しかし、その頃の芹沢先生は石器だか石ころだかよく分からない資料を研究されていて、日本にも何十万年前から人が住んでいたんだと主張されていました。「お前これをやれ」とすすめられて、何とはなしにそれを研究しました。日本列島にいつ頃から人が住み始めたのか、日本列島の一番最初の人類はどこまでさかのぼれるのかと言うテーマにしろと言うことで。宮城県で座散乱木遺跡、馬場壇A遺跡の調査—今は上高森遺跡が一番古くて、今から60万年も前から日本列島に人がいたということが分かってきましたが—だとか、北京周口店に北京原人がいて生活していた頃もう日本にもそれと同じ時代の人々がいた、そういうことを明らかにしていく研究をしていました。ずっと旧石器時代を研究していましたが、東北歴史資料館に行ってから松島湾の里浜貝塚を掘りまして、縄文時代の人たちはどんな物を食べて暮らして居たのかと言うことを研究するようになりました。貝塚は言つて見れば生ゴミ捨て場ですので、生ゴミあさりをして当時の人たちはどんな物を食べていたのか、と言うようなことを研究していました。

ところで、今日縄文時代の話をするとは、だいぶ私も変わったなと思うんですが、なぜわたしがこの頃縄文をやるか、なぜ今日縄文の話をするか、このことについてちょっと聞いて頂きたいと思ひます。私は東京に行ってから10年がたちますが、その間に縄文時代がドンドン見直されてきている。いま日本に1,400ぐらい史跡がありますが、そのうち100近い史跡が縄文時代です。旧石器時代で国史跡になっているのが7つしかない。今、縄文時代の人々の精神、物の考え方とか暮らしぶりというのは一体どんなだったかを解明し、縄文人に学ぶ必要性が何か今の社会、世相の中から無意識的に感じられているような気がします。縄文縄文と皆様がおっしゃるように、具体的に私の仕事から申しますと、国史跡になっている縄文時代の遺跡を解明してそこで分かったことから、例えば家の跡を復元したり、お墓の跡を復元する。あるいはそこで行われていたお祭りなんかを復元して再現する。そういった仕事が必要になってきて、遺跡の内容、縄文時代は具体的にどんな生活をしていったのか、縄

文人は何を考えていたのか、と言うような事まで説明できないと仕事をしていけなくなっています。私の研究は、人の書いたものを読んで勉強し、ワープロに向かいながら考えをまとめ原稿を書いていく。ファーストハンドの物が扱えない。生の資料が扱えない。人の考えた物をまとめることしか出来ない。あるいは全国を100日位歩いていますから、その間にあんな事がある、こんな事がある、といういろいろな情報を集約できる立場にありますので、そんなことから勉強している。

そこで今日は、縄文時代の全体像がどんなだったか、新しくどんなことが分かってきたのかと言うことについてお話ししようと思います。本当に縄文時代観は変わったのか。最近、縄文時代観が大きく変わった理由の一つに、開発前の大規模調査をしていることがあります。三内丸山は運動公園ができる、伊勢堂岱遺跡も道路ができる、と言うことで発掘調査が行われました。全国的には開発前の調査の原因の一番大きなのは宅地造成で、中には広い範囲を掘ることがあります。開発が大規模化していますので、大規模な範囲を全部掘って、その遺跡の内容を調べるようになってきています。ですから集落全体だとか、台地上にある村の全体を掘る。あるいはこの頃は周辺にも何か施設があるのではないかと調査する。考えて見れば当たり前の事なのですが、台地の上だけではなく、水だって利用しなければいけないし、周辺の林の中にも入り込んで行かなければいけない。そのためには隣り村との間や水場との間に道をつくらなければならない、というように村とその周辺とさらに向こうの村と連携するためにいろんな施設を整備している。今まで考えていなかったような所まで発掘するようになって、こんな所にこんな物があるんだと言ったことがドンドン分かるようになってきている。これも大きな背景だと思います。

また、低湿地遺跡の本格的な調査の例として福井県の鳥浜貝塚が画期をなしました。鳥浜は終わってもう15年くらい経ってますかね。河川改修が原因で10年くらい掘っていました。河川改修と言うことは、遺跡は水にいつでも浸されている低いところにあると言うことです。水漬りの所ですから、木の実とか木で作った道具だとか、あるいは生ゴミ、食べかすなどが捨てられていたり、あるいは犬の糞だと思いますが、糞の化石になった物がでてきたり、縄文の縄を転がす時の縄そのものが出てきたり、乾燥した台地の上ではみんな腐ってしまうような物がわんさかでてきた。すごいということで、そんなのがきっかけになって自然科学との提携が進んだというような画期的な調査が鳥浜貝塚で行われた。つまり、ドンドン調査の面積が広がっていき、生々しい出土物は縄文文化の復元的な研究を促しました。今まで縄文時代の研究というと、どちらの土器が古くてどちらの土器が新しいか。土器型式と言うのがあって、土器で年代の物差しを作るような作業を盛んにしていました。どうしても土器中心の研究で、今でも大体縄文時代の論文の内の3分の2くらいは縄文土器の研究論文のようです。そうした中で、先ほど言いました1,200億円も発掘でお金を使っています。その結果何が分かったのかと言うことが、常に問われるようになってきています。何が分かってきたかということを説明するときに、当時の人たちはこんな生活をしていた、というふうに復元的に説明することと、もっと更に今現在の社会にとってどんな意味があるのか、これからの行く末を見通す上でも縄文時代はどうだったか、平安時代の東北地方の暮らしぶりはどうだったのか、そしてそれに学ぶべき物は無いのか、もっと進めて、その遺跡を保存してその遺跡に行ってみたら当時の生活が分かって、その地域の人々の心のよりどころになるとか、町づくりの上で確かな空間として、自分たちの祖先が歩んできた歴史に触れ、歴史を学ぶ場所としたり、歴史に触れて自分たちの精神のよりどころを見つけていく、さら

に進めて人が沢山きて観光など、町おこしの材料になる。そういった事が盛んに求められてきている。何が分かったか、それだけお金をかけて何が分かったかと言うことが非常に問われている時代だろうと思います。都道府県の埋蔵文化財センターにいる専門職員が、発掘費用を年間1人当たりいくらずつ使っているか単純に計算すると、大体3,500万円から4,000万円くらい使っていることになります。市町村の専門職員で大体1,900万円くらい使っています。それだけの事をしているのだからもっといろんな事が分かなければまずい。遺跡をドンドン壊していつているのだから、いろいろ分かなければ困る。そういった背景のなかでより復元的に縄文時代を語る、各時代を語る、と言う事が問われるようになってきています。毎年1万件も発掘しているんですから、膨大な資料が蓄積してきているわけです。単純に出てきた出土遺物の量だけ言いますと、パンケースみたいなものに入れて全国に490万箱くらいあります。膨大な資料が出てきて、その中からいろいろ歴史が復元出来るような材料が用意されてきた。あるいはいろいろな地域と比較研究をして縄文時代を復元する、そういうことが出来るようになってきた。そういう大きな背景があった。そういう中で縄文時代が分かってきて、ドンドン解明が進んでだんだん縄文時代が変わってきている、縄文時代観が変わってきている、と言うふうに見えてきていると思います。ところで、縄文時代と言っても全国広いわけで、大ざっぱに言って、鹿児島県から北海道までの間の縄文土器が使われていた時代と言ってよいと思います。その中で地域によって自然環境も違いますし、そこで暮らす人たちの考え方も生活の様式も違います。今日はそんな細かいことは全部抜いて、大体、東日本の範囲で、いろんな事実をモザイク状につなぎあわせていくと、こんな縄文時代の進んだ生活の要素が分かる、と言ったような話をします。

まず、食料獲得と保存・貯蔵について説明しましょう。最近では、貝塚や低湿地遺跡の調査が進展して、例えば層ごとに定量分析をするようになってきている。定量分析は遺跡の土や貝層を全部持ってきて、その中に何がどれぐらいの割合で含まれているかという事を細かく分析するんです。今までのように、ただ目に付いた物を掘り上げるような調査ではなく、出てきた物全部を分析してみる。そういうふうにしてみると、例えば貝塚を掘ると意外と細かなイワシの骨だとかアジの骨だとかの小魚の骨が沢山出てきます。今まで教科書的には、何となくマグロやマダイ、あるいはクロダイをとっていたように思われるかもしれませんが、そうじゃなくて、内陸の湖でもフナやナマズに似たギギという魚を多量に捕獲しています。実際、90%を超えるぐらいの量が小魚類だったりしています。小魚を多量に囲い込んでとるような技術、例えば、川の流れをうまく利用して袋状になるような柵を作ったり、罟のようなものをおいてその中に魚が沢山入ってくるようにする、あるいは海だと石垣のようなものが考えられます。魚がどっと押し寄せてきて、湾の近くから、湾の奥に入ってきます。それを遮断して、水がひいたときに囲い込んだ柵や垣の中に多量に魚が残る。そういった割合単純な仕掛け、言ってみれば寝て待っていれば捕れる、そういった仕掛けで魚の習性をうまく利用して沢山捕獲する、そういうことをしています。

また、山のほうだと、落とし穴を一山全体に沢山作ると言ったこともやっています。獣道もよく分かっていて、動物も囲い込んで追い込んでとる、と言うような仕掛けも作っているのです。出来るだけ一生懸命働かないで多量に物が捕れるといった仕掛けを考え出しています。今でも、縄文人はシカやイノシシと言った大きな動物だとか、マダイやクロダイを捕って、マグロも遠洋に出かけて捕っていたなんてことをいってる人がいますが、実際はそうではなく、出来るだけ働かないで、自分の身の

回りで出来るだけ多量に捕って、一日おしゃべりでもしながら生活している。大体1日4時間も働いたらいいんじゃないかと言っている人もいます。このような定量分析という細かな物まで捨てないで分析する事によって、いろいろな事が解ってきた。

今までは魚とか動物の話をしてきましたが、2番目に堅果類の話をする。縄文人は、堅果類、クリだとかクルミだとかトチの実だとかの堅果類も沢山取っている。そう言う堅果類と貝や魚や獣などの動物性の食料とを、大体どの位の割合で取っているのかと言うのがなかなか今までわからなかった。鳥浜貝塚が調査されるまではと言っていいでしょうか。あまり湿った低いところを掘っていない時には、弓矢で獣を獲り、魚を網で捕ってということをしていましたが、どうも一番効率のいい木の実がなってきたときにみんなで集まってドンドン採ればいい。木の実にも相当依存している事が解ってきた。実際にどのぐらいの割合なのかといった事がなかなか分からなくて、私も貝塚を掘っているときは動物の骨と貝殻ばかりを見ていました。たまに木の実が炭になって出てきますので、木の実をだいたい食べていたんだなということが分かりますが、実際どれくらい木の実を採っていたのか、これがなかなか分からない。ところが、近年、滋賀県の琵琶湖のほとりにあります栗津という湖底に堆積した貝塚が調査されました。ここでは木の実と動物の骨、貝殻と一緒に出てきて、秋には木の実を採り、夏には魚を捕る、と言った季節的な繰り返しをはっきり分かりました。さらに、ここではカロリー計算もされています。簡単に言いますと、どんな物がどのぐらいの割合で出てきたかを1つ1つ現代の標本を作って、例えばクルミを採ってきて、このクルミと同じクルミが何個出てきたかを数えます。また、栗津の場合はトチの実がたくさん出ています。トチの実が何個あるか、それから貝殻何個、キギとかフナがどれぐらいはいるか、イノシシやシカ・・・・・・、と言うように食品リストを作って行って、その量を調べて、クルミ1個あたり何カロリーとれるか、この魚1匹あたり何カロリーとれるかとカロリー計算していきますと、大体総カロリーの6割が木の実だと解りました。大体、植物質食料が6に対して動物質食料が4の割合というのが、現在の温帯地方にいる狩猟採集民の食料割合です。こういう事から言って、十分に妥当性のある結果だろうと思います。栗津は内陸の湖沼地帯ですから、たぶん海辺はより海の魚に依存しているでしょうし、山では木の実への依存率が高い、そういうことになると思います。いずれその地域、その地域の自然環境の中で、出来るだけ楽に多量にとれる、と言うことを基盤にしているようです。これは当たり前の話です。自然を熟知して、どこに行ったら何がとれるか、食料はどんな物がとれるか、よく知っていて、それを効率よく取り入れています。

それから、この頃クリを栽培していたのではない、三内丸山でもクリを栽培していたのではない、と言うことが盛んに言われています。これもDNAというクリの中に含まれている遺伝子の配列が非常によく揃っている、栽培することによって性質を均一化していく中でDNAが揃うんだという説明がされてます。しかし、それは本当にそうなのかなと思います。科学の世界は自分の目で確認できないというところが何となく不安です。先ほどの報告で墓の分析について科学的な分析をしますと言うような事を小袋岱遺跡のところで言っていました。墓の分析では、脂肪酸分析が最近よく行われています。どうも、この脂肪酸分析も怪しげです。私もずっと自然科学者としていますが、人文科学の人よりも遥かに科学的でない自然科学者もたまにはいますし、その理論はあくまでも理論であって、ほんとに正しいかは分からないこともあります。そういう意味では考古学的事実とクロス・チェックしながら、どちらが科学的に正しいのか勝負しなければいけないと思います。そういう

勝負の歴史をここ 20 年ぐらい振り返ってみますと、必ずしも自然科学にだけ軍配が上がっているわけではありません。消えていった方法もあります。その時にものすごく流行った方法が今はやられていない。そういう意味でもクリの DNA は大丈夫かなと思わなくともありません。もう少し付け加えますと、青森あたりがクリの分布の限界なんですね。北海道では道南に少しあるくらいで渡島半島まで基本的には達していません。一番北の極限のところで、ある部分でしか山栗が生えていなかった状況も考えられます。DNA が揃うのは、栽培したから揃うのではなく、植生限界だから揃う事だってあるかもしれない。まだまだ分かりませんが、いずれにせよ遺跡でクリが多量に出てくる、花粉もいっぱいある、これは事実です。静岡県の森の石松で有名な森町というところに坂田北と言う遺跡があります。この遺跡の谷底に、ひょろひょろと水が流れていて、湿ったところにクリの木の根が並んでいて、周りにクリだとかドングリ等を貯蔵している穴がある。地下に穴を掘ってためておくような施設が出てきているのです。それだけの場所が発見されています。そこのクリの実是非常に大きいです。本来、陽樹、つまり日当たりいい高いところが一番適した木ですが、そこの場合は湿ったジメジメしたところにおりてきた林である。あんなのを見ているとクリを栽培していたのかなという気がします。たぶんクリは栽培されていたと思います。遺跡周辺の花粉分析結果はクリが多いですし、縄文人が使っている木の道具や建材を調べるとクリ材がほとんどです。北陸地方に杉が少し使われていますが、クリが非常に沢山使われています。クリの実に至る所に出てきます。本来食べてしまえば無くなってしまいますが、クリの実があれだけ炭化して出てきているということは、たぶんその背景に相当クリを採っていただろうと言えます。この頃、中間温帯と言う区分が盛んに植物のほうで言われます。中間温帯で主体となっているのはクリです。どうもクリに相当依存していた生活であったということが言えるそうです。クリだけでなくクルミも、そして後半にはトチノミもメジャーになりました。一方、縄文時代に農耕があったかどうかと言うことがずっと議論されてきました。この頃は、ひょうたん、豆類ー緑豆とかですがー、ゴボウ、エゴマだとか、栽培種と考えた方がよさそうなものが結構出てきていまして、縄文時代に栽培があったかどうかと言うレベルでいうと確実にあったと言っていると思います。ただし、それは主体にはなっていなかっただろう。栽培種は知っていたけれど、それを取り入れて、特定の栽培植物に頼るような生活は選択しなかったと言うふうに考えた方がいいんじゃないかと思います。先ほどから言っているように、身の回りの食べられるもの、たくさんの種類の食べられるものを知ってて、うまい順番に、効率のいい順番に採っていったと言っているのではないかな。どっか欠けても大丈夫なような仕掛けを身の回りで作っていたのではないかなと思います。そういった時に、栽培植物はその一部分だという気がします。そして、このように考えてみると、縄文人はそれほど一生懸命に働かなくとも十分周りの自然は豊かな恵みを与えてくれた、そんなふうと考えられそうです。じゃあ先ほど言いました物は、春と秋の季節にどどっと多量にとれます。春と秋に魚は押し寄せてきますし、大きく依存していた木の実、秋の 10 月頃に集中的に採れます。一時に大量に採れたものを、保存貯蔵して、まんべんなく一年間暮らすか、その仕掛けを作る。木の実、冷蔵庫がなくても保存できますが、ほかのものは保存貯蔵の仕掛けを作らなければいけない。次にその工夫の話をしていきます。

まず、煮て乾かす方法があります。煮ればある程度もちます。これは当たり前の事ですね。干し貝を作っているのではないかな、つまり、貝を茹でてむき身にし、干して保存食量にしていたのではない

か。これはずいぶん昔から言われていました。後でちょっとスライドでご説明しますが、東京のど真ん中の北区の中里貝塚というところでは、干し貝を作っていたらしい作業場の跡や干し貝を作ったときの沢山の貝殻が出てきています。4mほどの厚さの貝層がずっと砂浜の上に1kmにも渡って形成されています。いろいろなものを干して、保存してしている。それから薫製があります。図1は鹿児島市掃除山遺跡で見つかった炉穴で、今から1万1千年ないし2千年ぐらい前の土の中に掘られた穴です。図の上の方は上から見た坑^{あな}の形、下の方は断面から見た穴の形です。上の図の右側が人が入る皿状に窪んだ穴で、その左側にトンネルがあって煙が出ていく。トンネルの出口の底面あたりには脂肪酸が検出されています。先ほど怪しげな方法だと言ってすぐ援用するのも何なんです、とにかくここに脂肪が多いというのは事実です。それから炊き口のトンネルのすぐ手前あたりに炭が沢山出てきています。ここで火を焚いて実験してみますと、トンネルに煙が誘導されてその先から煙がぼんぼん出てくる。その煙の出口に鳥だとか魚をぶら下げておきます。そうすると3時間も4時間も燻すと立派な薫製が出来て大変おいしいらしい。実験結果もかなり良好です、これは日本で一番古い薫煙用の施設と言えそうです。ここ以外でも、関東より南では、縄文時代早期まで—今から6千年位前まで—盛んに薫製という保存食料品を作っていたらしい。ひとたび、薫製という料理方法を獲得したわけですから、こう言った地下の穴の中で薫製を作ること自体はやめましたが、たぶん薫製そのものは続いていたんだろうと思います。そういう証拠がどこかにあるんじゃないかと思います。

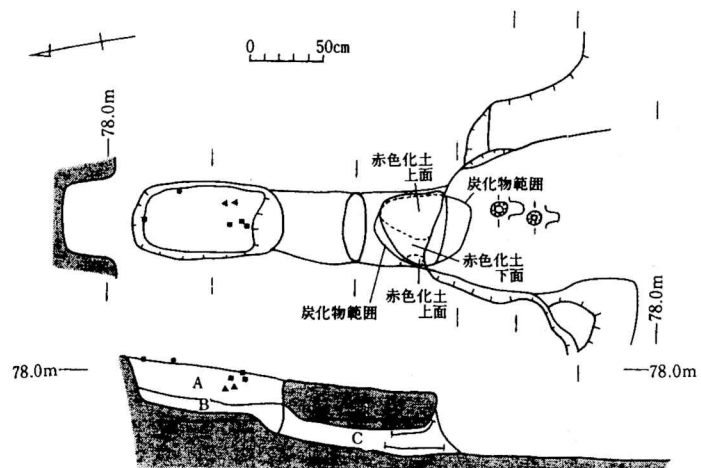


図1 掃除山遺跡の炉穴

それからレジュメに塩蔵と書きましたが、塩引きのような物です。塩に漬けて保存する。縄文時代後期末になりますと、専用の土器を作って浜辺に並べて海水を注いで、これを煮つめて塩を採るというのを始めます。一方、例えば真鯛一匹を考えますと、頭一つに対して背骨が24個あります。貝塚に捨てられている頭と背骨の比率を見ますと、頭が圧倒的に多くて背骨が少ないのです。たぶん頭をはずして、背骨の付いたまま開きにして持ち出す。塩蔵品にして出す。干して出す。そう言うことをしていたようです。鯖なんかも、海辺の貝塚では頭に対して背骨が非常に少ないです。貝層を全部取ってきて調べていますから、これはサンプルの見落としではなく、頭だけはねて、貝塚、つまりゴミ捨て場に捨てて、背骨付きの開きを持ち出している。また、仙台湾で塩を作った時の土器が山形県村上市の宮の前遺跡で出てきています。相当遠い距離を、たぶん土器だけでなく、塩がぴっしりくっついてような塩付き土器の破片が山の手に乗ばれていたようです。

それから木組みのさらし場と言うものも見つかっています。これも後でスライドでお見せしますが、近くに流れている小川に木組みや石組みで池のような物を作って、その中に木の実をさらすという施設があります。木の実をさらして灰汁抜きをしたり、それを粉にして貯蔵すると言うことが盛ん

に行われていたと思います。調理方法を見ても、煮沸して消毒して干し貝にしたり、煮込んだり、干したり、あるいは薫製にしたりと様々です。また、木の実を粉にして木の実を主体にした縄文のクッキーのようなものとか、ハンバーグのような形をしたコッペパンのようなものとかを作っています。あるいは、細いかりんとうのような物だとかが全国の20遺跡ぐらいから出ています。青森県、岩手県など東北でも出てますし、関東周辺でも見つかってきています。大体東日本全体にそういう木の実を粉にして焼いたパンのような物が見つかっています。そんなふうにしてやると相当保存がききます。木の実そのままのほかに、このようにクッキーのように調理した物でも保存する。

3番目に貯蔵穴群について説明します。地下に穴蔵を掘ってそこに木の実を貯蔵しておきますと、夏でも18度位に保って、冬でも零下になりません。地下の冷蔵庫のようになっていて、木の実をかなり長く貯蔵できる。実際、宮城県の蔵王山麓などでも木の箱の中に砂を入れて、そこにクリを保存している。土の中に木の実を入れて貯蔵するという方法がいまでも行われているわけです。食料をとにかく確保して保存して、一年中安定して暮らせるような仕掛けをしていた。大きな村を作って定住して、そこにじっとしているとその村で不足している物が出てきます。不足する物を他から効率よく取り入れるために、広域のネットワーク、つまり村と村とのネットワークが必要になるわけです。縄文人の日常生活圏は隣の村と競合しないような自然の自分たちのエリアです。一般にとりの拠点的な遺跡までの距離が大体4kmくらいですから、この日常生活圏は半径1.5kmから2km位と考えられます。更にゴミ捨て場の中から出てくる主体となるような生ゴミを見ていくと、大体1km位、もっと近いでしょうか、数百m位の範囲の中で採れるような物ばかりです。そういうふうに日常生活圏は設定出来ます。そう言う日常生活圏ではなくて、中・長距離交易圏と言うものがあります。半径100kmとか、物によっては200～300km先から不足物を広域で取り入れる、そういうシステムを作っています。図2・3を見ていただけますか。図にはアスファルトとオオツタノハ製の貝輪と言う一番典型的な物をあげておきました。アスファルトというのはご存じの通り縄文時代の接着剤です。現代では道の舗装に使われるアスファルトです。天然で出る場所は日本海中心にいくつかありますが、特にその中で秋田県の昭和町槻木と言うところから自噴してくるのがよく知られています。そこはコールタールの池のようになっているみたいですが、その周辺に土器がばらばら出てくる。アスファルト産地で遺跡があるのは今のところこの昭和町の槻木しかない。近年のアスファルト産地の分析結果によりますと、多くはこの昭和町産らしい。これらは北海道大学の小笠原先生の分析結果ですが、どうも秋田県の昭和町を中心にアスファルトが図2のように広い範囲で供給されているようです。まるで囲った所は石の鏝に矢柄をつける時の接着剤としてアスファルトが、石鏝100本のうちの30本くらいに頻繁に用いられている範囲です。仙台湾なんかは昭和町から見れば相当な遠隔地です。そういう所にアスファルトが土器に入れられて運ばれているようです。どれくらいの距離でしょうか。北海道南部までいっているようですので、200～300km位はある。石斧は100km圏位です。糸魚川産の蛇紋岩の石斧が広がっている地域があります。これは大体100km圏位です。新潟市の北にいきますとほとんどなくなってきます。あるいは富山県に流れている境川流域にある石を使った石斧の広がりも大体100km圏位です。石斧もそれぞれの村で作ったんじゃなくて石斧を作る村があった。石棒という石で作った男性のシンボルを作った村もありました。今までのところ、石棒作りの村は群馬県、岐阜県、富山県、京都府にそれぞれ1箇所、全部で4つ見つかっています。あるいは耳飾りを作る村があった。それから塩を作る

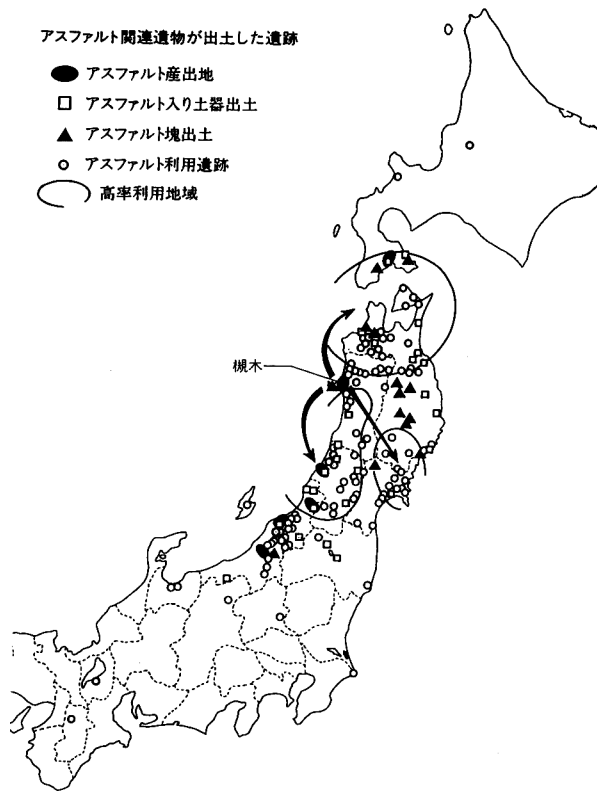


図2 アスファルトの道

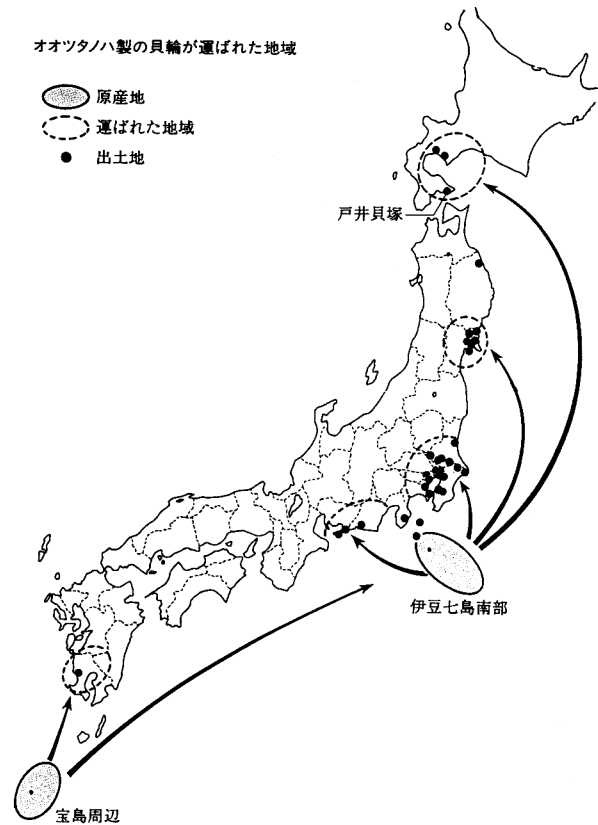


図3 オオツタノハの道

村があった。そういう手工業的な生産をやっているんですね。今後、更にある特殊な物を作って周辺の村に供給していると言った手工業的な姿がドンドン見えてくるだろうと思います。それから、先ほども黒曜石は当時の大切な石の槍の材料だと言う話が小袋岱遺跡の報告でありましたが、黒曜石はやっぱり石器を作る材料としてはピカイチです。旧石器時代の人、200~300km離れた非常に遠いところまで採りに行っています。縄文時代になるとちゃんと広域ネットワークが出来ていて、黒曜石は供給されています。黒曜石は割合に供給システムが分かっているのので例としてあげますが、たぶん他の物も同じような運搬のされかたをしていると思います。中部高地の真ん中あたりに黒曜石産地がいくつかあります。その黒曜石が採れる山の麓に、例えば茅野市、原村、諏訪市などですが、縄文時代中期の集落跡で20~30個ほど黒曜石の原石をストックしている跡が見つかっています。麓の20~30km位の範囲にある定住的な村にはほとんどみんな黒曜石がストックされています。それが200~300km位離れますと、甲府盆地とか一番遠い所では群馬県の前橋、栃木県の佐野とかの北関東あたりですが、今度は拠点の村だけに入ります。拠点の村、つまりその辺の地域の中心的な村に黒曜石がストックされているのが発見されています。それからその周囲の村に黒曜石原石が供給される。そこで原石から石器を作っていて、石器の作りかけとか石器のかすなんか一杯出てきます。ところがこの地域を離れると、具体的に言いますと千葉とか、茨城あたりですが、黒曜石は完成した石器しか発見されません。この完成品も原産地から何100kmも離れていますから、小さくなっています。大事な石材だから、何度も修理しながら道具を作っている。そうして小さくなった完成品の石器が千葉・茨城県なんかでポツポツ出てきているのです。

今の話を総合しますと、原産地の麓の村が黒曜石を採り出してストックし、そのある部分が200～300km離れた拠点的な村に持ち込まれる。そして、その拠点的な村を中心に原石がばらまかれ、更に遠いところには完成品しか運ばれない。そう言った村と村との広域のネットワークがだいたい見えてきています。具体的にこの峠を越えて、こう降りていったその麓の村に黒曜石がストックされていた。大体この谷間をずっと行った北関東の山間の村に黒曜石はいったん中継されるというような具体的なルートまで見えるような状況になってきています。図4が、黒曜石が20～30個ストックされている穴です。村の広場にストックされています。竪穴住居のすぐ脇なんかにストックされています。図5は、伊豆の河津町の後期を主体とした段間と言う遺跡から見つかった20kgだったかの大きな黒曜石の原石です。これは伊豆七島の神津島の黒曜石が舟を使ってずっと大島をへて、ここまで運ばれたものです。また、大分県の姫島にも独特な灰色っぽい黒曜石があります。それが国東半島の羽田と言う遺跡にぽつぽつ出てきます。要するに陸揚げ港があるわけです。舟でずっと黒曜石が運ばれて、陸揚げ港があって、そこを中心にして分散していく、という図式が見えてきています。

次に図3のオオタツタノハの道について説明します。オオタツタノハと言う貝は、南の島、トカラ列島の宝島とか伊豆七島でもずっと南の方でないと捕れない傘貝の仲間の扁平な貝なんです、その真ん中をくり



図4 高風呂遺跡の住居址内の黒曜石集中地点

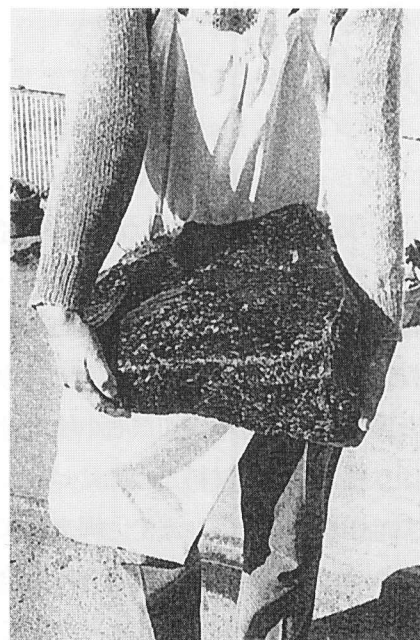


図5 段間遺跡から出土した重さ約19.5kgの大形黒曜石

ぬいてプレスレットにしています。この貝輪の完成品が、東京湾周辺、霞ヶ浦周辺、それから仙台湾と北上川流域、岩手県の久慈の二子貝塚、北海道南部の戸井町戸井貝塚だとか、伊達市有珠10遺跡だとかそういった所で出てきています。要するに1,000km、2,000kmの範囲を貴重品が動いている。そういう例が増えています。琥珀も同じです。琥珀は、岩手県の久慈、千葉県の銚子、あとは福島県いわきの海岸、それから岐阜県の瑞浪などいくつか産地があります。琥珀をたんねんに追っかけていくと相当出ています。さきほど話をしました滋賀の粟津湖底遺跡、石川県の能都町の真脇遺跡からも琥珀が出ています。随分琥珀も広がってきています。この琥珀の産地同定をしますと、いわきの海岸から採られたものが山梨県に入っていたりします。この場合でも200～300km離れています。いろいろな面で物流が見えてきています。それを支えたのは海路と尾根や谷伝いの陸路だったでしょう。特に、先の

オオツタノハ製の貝輪でおわかりでしょうが、もっとも頻繁だったのが海路と考えられます。黒曜石もそうですが、舟を使うと多量に運搬することができます。そういう意味で舟は便利です。イモガイも珍重されていて、縄文時代の早期から、今から 6,000 年、7,000 年位前ですが、イモ貝や寶貝が大きく日本列島の中を動いています。

踏分け道や木道が発見されています。踏分け道が一般的で縄文時代でもかなり分かってきています。鹿児島島の種子島の奥仁田と言う遺跡で 12,000 年前の踏み分け道が見つかっていますし、鹿児島島の縄文早期の前原遺跡と言うところでも村の中を通して、谷筋を降りていく道がわかる。そういった例が出ています。北海道でも 2・3 例出ています。また、木道というのは、村からおりて隣の村に行く途中のじめじめした低湿地を歩くときにクリ材をだーっと横に並べて、それが動かないように杭を打って、何 10m に渡って作った物です。このような木道が、埼玉県や神奈川県などで見つかっています。また、丸木舟を転用した木道が淡路島や鳥取県で見つかったりしており、随分そんな例が増えてきています。

さらに、山形県境に近い新潟県北部の朝日村にある元屋敷遺跡からは、ついに石敷きの道が発見されました。この地域に大きなダムの計画があり、ダムができると遺跡が水没するので、その前に調査を行っています。この元屋敷遺跡では石斧作りを盛んにやっています。ここでは、水場を作って、その脇で、石を割って水を使って研ぐ石斧作りをしています。水場は 2 つあって、お互い 40m 位離れていますが、その間に幅が 2m 位の道がある。その道の路肩には石が並べて置いてあって中には砂利が敷かれてある。砂利の中には細かく砕いた土器なども混じっていました。

一方では、舟の水上交通があります。丸木舟には前の方と後ろの方に間仕切というか境を作っているものもあります。丸木舟は全国で大体 40 遺跡から 100 艘位出ています。残念ながら北海道・東北では確実な物は出ていません。ただし、郡山市ではほぼ丸木舟と言っていい物が出ています。オールは東北地方でもぱらぱらと出ていますから、舟があったに違いありません。丸木舟は大体 7m 位の長さのタイプと、4m 弱位のタイプの大小のタイプがあります。7m 位のタイプと言うのはもう小型漁船の大きさなんです。小型漁船で大海に出て行ったようです。今まで丸木舟は割合内陸で見つかったので、内陸専用だろうという意見もありましたが、この頃は海端からもかなり見つかってきています。それらはやっぱり 7m 位の大きさですので、やはりこれで大海にでていったんだろうと思います。さらに、確認しやすい黒曜石を例にあげて、少し補足しておきます。黒曜石の産地分析からは、沿海州と東北日本、九州と朝鮮半島南部がそれぞれ頻繁に交流しているのが分かってきています。そのぐらいの海はへっちゃらで舟を出している。先ほど伊豆七島のことでも説明しました。伊豆半島まで舟による物流が認められた。相当の舟の行き交いがあっただろうと言うことが分かってきています。このように、資材なんかを安定して供給するために物流のネットワークができた。それは単なるネットワークではなくて、運搬道具、運搬路、それからどこの村にどんな物を作っているのか、という集落と集落の情報ネットワークがなければ成立しないわけです。そういう点で相当高度な社会的な仕組みが出来てきている。黒曜石なんかは弥生時代になると、東北・関東などの東日本では社会的ネットワークが崩れて、ほとんど流通しなくなります。まだ打製石器が使われていますが、ほとんど黒曜石が流通しなくなって、在地の石材で石器を作る。東日本は弥生時代には、いきなりそういう縄文時代からの社会的ネットワークが崩れた。東北日本でこれだけ発達した縄文文化は、単純に考えると弥生

時代になって、あるいはその先になるともっと発展するだろうと思うわけですが、必ずしも物事というの是一方向に発展していきません。

よく三内丸山遺跡と吉野ヶ里遺跡とを比較しますが、それほど無茶な対比ではない。可能な限り複雑なネットワーク、仕組みを作って、東北日本に適した縄文文化を発展させていった。そういうふうに見てもいいと思います。これは縄文人の末裔である、私たち東日本人のあるいは東北日本の人間が、誇りにしていい話だろうと思います。そういうネットワークが出来て、それを行う上で基盤になるのは定住生活です。定住生活のために、いかに設備投資をして設備を充実して生活を安定させたか言う点もこの頃かなりわかってきた。集落内外の造成や諸施設の建設、つまり大土木工事があったことが分かってきています。ひっそりと土地の造成もしないで、自然のままにそこにへばりついて生活していた縄文人観だったが、かなり違っていたようです。小林達雄先生は自然の人工化と呼んでいます、自然に人手を加えて自分たちが住みよいような環境を作っていくと言うような仕掛けをしていたようです。例えば、中央広場となる平坦面の造成があります。先ほど伊勢堂岱遺跡の報告でも説明されていましたが、真ん中の高いところを削って、削った土を低い方に持って行って造成している。三内丸山でも認められるし、岩手県の宮古市の崎山貝塚でも見つかっています。ここでは、低丘陵の頭を平らにすぼんと飛ばすぐらい削って両脇に押し出して平坦面を作っています。平坦面を作ってグランド造成みたいにして、その真ん中にドーナツ状に堀を掘って、その中に広場が取り残されている。その両脇東西に石が立てられている。東村と西村を作る。そして真ん中に墓を作る。そういう宅地造成をしている村も分かってきている。環状列石が見つかっているところは、みんなどこも真ん中に広場を作っています。土を押し出して低い方に盛って平坦面を作り出して、その広場を中心に配石を作ると言うことが分かってきています。崎山貝塚では高い中央広場周辺に土を盛って平坦面を作り、溝で中央広場を区画している。環状列石の場合は、平坦地を造成して石を環状に並べて区画している。集落内を区画する堀・溝・柵、あるいは並べた石などのほか、杭なんかで遮蔽していると思わせるような物も出てきています。広場を巡る堀が北海道の千歳市と苫小牧市で見つかっています。400m位の長さで、長軸70mぐらいにぐるっと巡っている。伊勢堂岱遺跡でも山の中腹に段を作ってぐるっと巡らしている。そういう祭りの場を作り出す、あるいは、祭りの場所と日常の場所を区画するための溝、墓地を囲うための溝、柵とか、あるいは外部から家を遮蔽するための柵、板塀とかが見つかってきています。これも今まで予想していなかったことです。縄文の村に堀や溝や柵があるとは考えていなかった。しかし、実は昔から断片的に報告はされてました。図6は秋田市の上新城中学校遺跡の柵列です。真ん中に2重にまわっている細い溝を掘って、底に杭を立てて石で押さえ、そこに土を埋め戻して作った柵列の跡です。中央下あたりに四角く線を引いていますが、これは掘立小屋の跡です。この2軒の掘立小屋を柵で囲って、左下、左上、右上3箇所の墓地と区画している施設が見つかっています。こんな施設まで縄文の村にはありました。他に集落の諸施設として、大型の竪穴もあります。1棟が10mを超える大きな竪穴で、場合によっては30数mの大きさになる場合もあります。集会所とか、冬みんな集まって集合生活をするとか、作業小屋だとかいろいろな使われ方が推定されています。あるいは掘立柱の建物、盛土遺構、埋設土器もありました。そして、集落周辺にも諸施設、例えば木の実をさらしたり、飲料水を確保したり、木の半製品を寝かしている木組みや石組みの水場、踏分け道、木道、あるいは魚を囲い込むヤナ場、獣の落とし穴、製塩の場所、祭祀の場所、粘土の採掘坑なども見

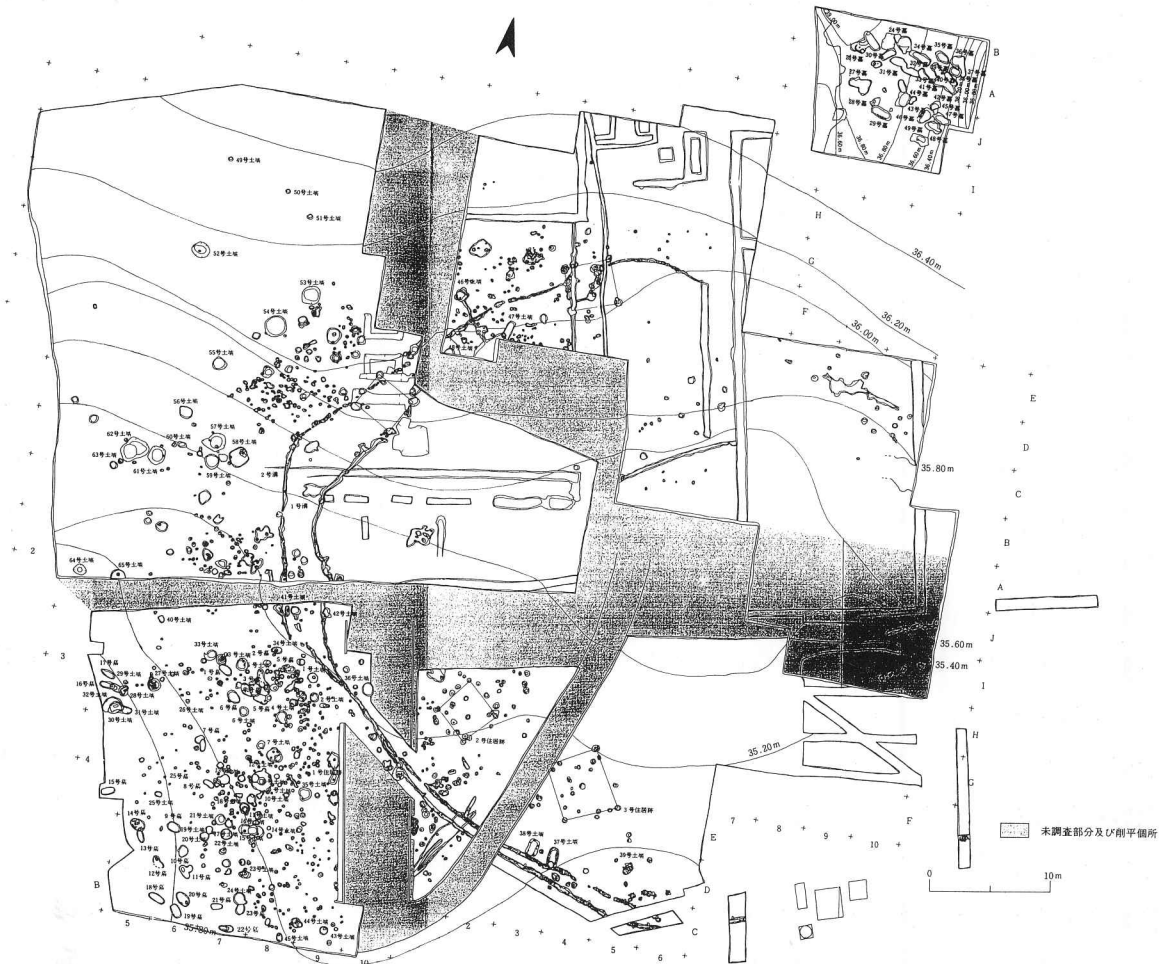


図6 秋田県上新城中学校遺跡の柵列

つかっています。粘土の採掘坑は秋田の家の後遺跡など全国で20箇所ほど見つかっています。そのうち、東京の多摩ニュータウンでは、500m離れた縄文中期の終わり頃の遺跡同士で、村から出てきた土器と粘土の採掘の穴の中から出てきた土器がくっついていて、ある村の粘土取りの場所が500m先にあったということが分かっています。

ところで、どの位時間がたちましたか。私は、東京に行ってから、時計をしないで自分の生命時計だけで動こうと、縄文人になりきろうと思って仕事をしています。文部省の中に一人ぐらい、縄文人がいてもいいかなと思っています。私は年中役所の中で革靴は履かないで、素足にサンダルで居ます。ただし、長官の部屋に入るとき、次長の部屋へ入るときはさすがに背広を着て、靴下をつけて革靴を履きます。それ以外は、裸足で時計を持ちません。少なくともそのぐらいは縄文人の気持ちを持ち続けていて、いつ現場に帰っても発掘は継続できるという気持ちだけはと思っています。

次に祭礼と祭祀についてお話しします。縄文時代人には定住生活をして1,000年も同じ場所にいる場合があります。もちろん、当時の平均寿命が30数歳ですから、1人の人が1,000年もそこに生き残った訳ではありません。いずれにせよ定住生活をする、毎日同じ顔とつき合わせてなくては行けない。20人いたか30人いたか、大きな時は100人いた村もあったでしょうが、同じ人たちが毎日顔を合わせるとやっぱりいやになります。つまらないことで喧嘩をしたり、あるいは希少なものと余剰を誰か

が独り占めをしたりする。人と人とのつきあいの仕方が定住生活の中で凝縮されて、遊動生活をした旧石器時代では経験しなかったことを経験せざるをえなくなった。そのため、みんながいさかいを忘れて一体となるような仲間意識とかそういう意識を結集するための祭り、あるいは誰かが独占していたものをみんなが集まって消費する祭りが盛んに仕組まれる。火を焚いて石を並べて盛んに祭りをする、と言うのも当時の定住社会を維持する一つの仕掛けだったのです。

日本人は祭りをずっとやってきました。火の祭り、柱を立てるような祭りなんてものもあります。あるいは、青森に行くと「ねぶたっこ立てる」と言ったか、中心に何かを立ててみんなが等間隔に輪になって集まろうと言う、「誰か仮りに代表者に立てて」という意味の言葉があるようです。基本的に等距離外交をするような、中心の広場を囲んで車座になってみんなが取り組めるような、そういった集団原理の中で祭りを盛んにする。そんな祭りの仕掛けが見えてきた。その祭りのセンターであったのがやはり伊勢堂岱遺跡だとか、大湯の環状列石で、周辺の村々の寄り合いの場所だった、そんなことが分かってきています。縄文時代の前期の半ば、5,500年ぐらい前ですが、栃木県の宇都宮市に根古谷台と言う遺跡がありました。100年ぐらいしか祭りの場は維持出来ませんでした。真ん中に250人分位の墓穴があります。いくつかのまとまりがあって、ほぼそのまとまりごとに大型の建物が付属しています。1棟の長さ30m位ある建物が何回か建て替えられています。竪穴建物から、掘立柱建物に作り変えられています。5箇所位のところで常に同じような建物を建て替えながらそこで祭りをしている場所があります。先ほどの大湯や伊勢堂岱の報告で、6本柱の掘立柱建物の説明がありました。大湯も伊勢堂岱も同じように墓場を中心に仮設小屋のような物を頻繁に建て替えてそこで祭りをしていたようです。この根古谷台遺跡は斜面も全部掘ったんですが、ゴミ捨て場がありませんでした。生活のにおいがあまりしません。遺物もあまり出ていません。ただし、クリなどの木の実なんかの焼けたものはたくさん出ています。真ん中の墓地を中心にした周辺の村々の共同祭祀場だろうと思います。これはたぶん祭りの一つの原点で、縄文前期の関東あたりに集落共同体の祭り場ができた。東北北部や南部も含めてそういった祭り場は、縄文時代の後期になると非常に顕著になる。そんな社会的な仕組みが見えてくると思います。

縄文時代に階層が存在したかどうか、これも最近盛んに問題にされることです。みんな平等で、リーダーみたいなもの、身分の上下関係みたいなものはなかったんじゃないかとずっと言われてきました。しかし、どうも単純な上下関係じゃないとは思いますが、大きな土木工事などの時のリーダーがいて、設計図を書いてみんな働くようにと指揮をしなければいけない。リーダーは当然いるでしょう。祭りを司る人—おそらく女性—がいたでしょう。特に葬送儀礼などは、今の民俗例なんかを見ると、女の人が黒い布で顔を隠して死者の着物を着て出てきたりします。そういう祭りや葬式を司るリーダーがいたでしょう。手工業にしても、狩りだとか木の実を採るのだって、リーダーなしにはできないのですから、かなり職能的な階層、あとは男と女の差、同世代としての階層もあったと思います。いろいろな階層が錯綜して、常に上下関係に置かれるような階層じゃない階層社会が出来ていたのではないかと。これは墓から見ても説明できるようです。縄文時代の墓は基本的に一人一穴の平等な墓なんですけど、その中に、時と場合によって再編成される階層があったんじゃないかと思っています。と言うのは、墓の構造や何を持ってあの世へ行くか、つまりなにが副葬されているかなどを分析していくと、ある程度の階層が見えてくるような気がします。

最後にスライドをちょっと見ていただきます。大体お話したことのおさらいのようなスライドです。三内丸山遺跡です(図7)。野球場を作るために5ha発掘した。現在は大型の家、倉だと思われるものを復元し、そして展示館ができています。ここでは大規模な5haにも及ぶような発掘調査によって、遺跡の大きな広がりが見えるようになった。大規模な調査は止むおえずざるを得ない状況なのですが、大規模調査によって、村及びその周辺の様子がよく見えてくるようになってきた。小川が流れていて、その斜面に向かってゴミが捨てられています。この裾の方は水漬りになっていまして、普通だったら腐ってしまうような木の実だとか、骨だとか、木で出来た道具あるいは人骨も出てきます(図8)。この谷の肩部に幅1mほどの遺物の出ないベルト地帯があります。その谷側の肩に2m間隔くらいでクリ材の杭が連続して打ち込まれています。遺跡の脇を流れる沖館川から谷伝いに上ってくる道で、道の路肩をクリの杭で補強している。谷底に向う湿った所からクルミの殻、漆を塗った木の器、木の道具、骨の道具が沢山出てきます(図9)。この水漬りの谷が普通に残らないような貴重な情報をたくさん我々に提供してくれた。このような調査の先駆けが、福井県の鳥浜貝塚だったと思います。

これは宮城県の里浜と言う貝塚です(図10)。毎年厚さ30cm位づつ掘っていましたが、アサリが沢山出てくる純貝層があります。春から夏に潮干狩りを盛んにして干し貝を作った後の貝殻を捨てた純貝層があったり、魚の骨が多い層があったり、炭化した木の実が沢山出てくる層があったりします。これらの土層を全部持ち帰って調べてみますと、季節ごとに非常に豊かな生活をしていることが分かる。季節的な切れ目が全然なく、この純貝層を1年目、2年目、3年目の春から夏と読んでいきますと、大体これで14年分位のゴミの堆積であることが推定できます。毎年捨てて、切れ目が



図7 整備された三内丸山遺跡



図8 北の谷の発掘状況



図9 谷に捨てられた壊れた道具や生ゴミなど



図10 里浜貝塚西畑地点の貝層堆積状況

ないんで定住生活をしていたと言うことが分かりますし、季節ごとにどんな食生活をしていたかと言うことも分かります。この土を洗って見ますと、魚の骨が沢山入っていてその90%位が15~20cm位の鰯の骨です。

里浜貝塚から200m位浜辺に降りますと、波打ち際に塩を作った場所が出てきます。塩を作るには、土器の中に濃縮した海水を注ぎながら盛んに火を焚いて煮詰めます。その時の木を燃やした時にできた焼け土だとか、灰なんかが厚く堆積しています。塩づくりのために、専用の炉を作ってそこに専用の土器を置いていた作業場が見つかっています(図11・12)。塩作りと言った手工業的な生産が縄文時代の終わりになると始まります。



図11 里浜貝塚西畑地点から見た海辺の製塩場



図12 製塩場の焼け土・灰、製塩土器片など

これは大分県の龍頭という遺跡です。村から少し離れた低いところに穴を沢山掘っています。穴の下は水漬りで、この中に南京袋みたいに編んだ袋に木の実を入れて短期に貯蔵する穴です(図13・14)。



図13 龍頭遺跡の低地に築かれた貯蔵穴群

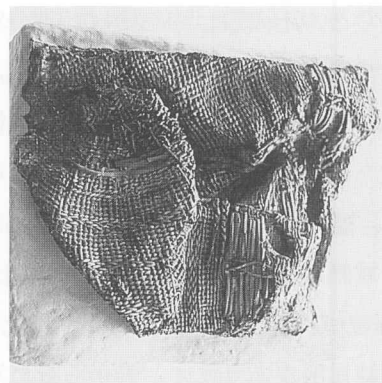


図14 貯蔵穴に納められていた木の実入り編み袋

東京都北区の中里貝塚です(図15)。厚さ4~5m位ずっと牡蠣と蛤の貝塚です。他の物はほとんど入ってこない、土器片すらほとんど入っていません。とにかく、牡蠣と蛤を多量に処理して捨てた貝塚です。こんな厚い貝層が砂浜の上に1kmもつながってあるらしいのです。これから1kmの広がりを少しずつ発掘して確認していく予定です。多量に捨てられた貝殻のすぐ脇の浜辺に、浅い皿状の坑を掘って、粘土を敷いた上に木の皮を敷いて、その中に焼けた石を投げ込んだ跡が見つかっています。波打ち際で、水が入ってくる所ですから、焼いた石を投げ込むと、石の余熱で水が瞬時に沸騰します。そして、あらかじめここに入れておいた牡蠣の口を開けさせると言うようなことをして貝を蒸す専用



図15 厚く堆積した中里貝塚の貝層

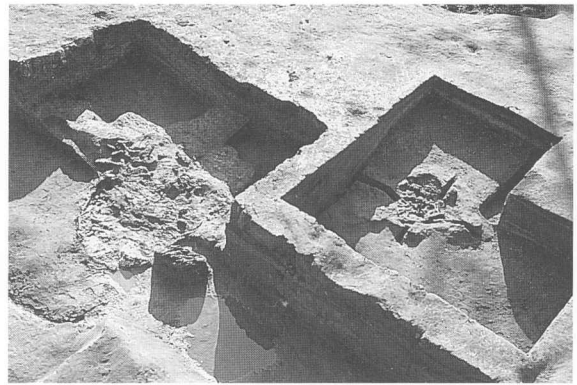


図16 浜辺に設置された貝蒸し施設

の施設だったようです(図16)。こういう場所はこの砂の堆積の中にいくつも出てきます。干し貝づくりの場所だったと言えそうです。

ところで貝層をずっと掘っていったら、下から杭が数本出てきて、杭に貝がまとわり付くようにひっついていました。人間が加工した杭だそうです。杭を作って、杭を海底に打ち込んで牡蠣が着装しやすいように、つまり牡蠣の養殖のような事をしていたんじゃないかと言われています。ほんとかなと疑ってもみますが、ただ、牡蠣の殻を見ると、もともとくっついてた岩だったら岩、木だとかがプレスされているわけです。そう言う状態は確かに木なんかにまとわっている牡蠣が結構あったことを示します。酒詰仲男先生が牡蠣を養殖していたんじゃないかと言っていますけど、その考えが証明されて来ていると思います。

去年の11月13日ぐらいだったと思いますが、天皇皇后両陛下が北区の中里貝塚の発掘調査の現場を見に来られた(図17)。私にとって非常に大きな出来事でした。じゅうたんを敷いたり、周りに汚くないように砂利を敷いたり、一番最初に誰が挨拶するか、お迎えに並ぶ順番はとか、周りの汚い物をみんなしまおうとか、交通規制とか、その準備に2週間位かかったようでした。要するに国民の象徴である天皇が発掘現場に来てくれた、また去年は縄文まほろば博で東京の20万人の人たちが新宿の伊勢丹で行った縄文の展示を見てくれた。去年は幅広く国民が遺跡に縄文時代に親しんだ年だと、そういう意味では非常に画期的で記念すべき年だったと思います。来年もまた考古速報展(発掘された日本列島展)をやりまして、ここの貝層剥取と天皇皇后両陛下が見に来られた時の写真を展示します。



図17 天皇皇后両陛下の行幸啓をえた中里貝塚

栃木の寺野東遺跡です。ここに環状盛土があって祭りをしていたらという意見もある所です。そのすぐ脇の谷の中から水場の跡が非常に典型的に発見されました。3m×7mのクリの板材で枠を連続的に作って、そこに砂利を敷いてこの中で木の実をさらすというような事をしています(図18)。

次の写真は、周りに砂利を敷いて1m×1mの板材を組んで、そこに水をためている(図19)。これは飲み水の確保用でしょうか、こんな水利用の実態が分かってきています。こう言う水場が今のところ



図18 谷部の水場に設けられた木組み



図19 谷部の水場に設けられた木組み

全国で10箇所ぐらい見つかっています。歴史的にずっと追いかけていくと、北九州市の弥生遺跡や12・3世紀の擦文時代の北海道奥尻島で水場が見つかったり、江戸時代の水場が四国の方で見つかったりとか、このような水利用がずっと現代まで歴史的におさえられそうです。

次は埼玉県の西部の縄文時代中期の塚越向山遺跡です。石組みの炉の中に据えられた注口土器の中に黒曜石原石やチャートの石片が入っていた(図20)。さらにそれらを取り上げた下から10本の完形石斧が出てきた(図21)。たぶんこれらはこの土器の中に入れて運ばれてきた交易品だと思います。



図20 炉に置いた石斧と石器原材を入れた土器

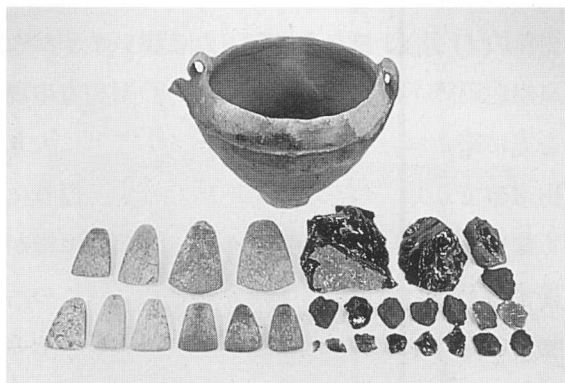


図21 土器と石斧、石器原材の黒曜石など



図22 炉脇に据えられたアスファルト塊

次は北海道南部の南茅部町の磨光B遺跡です。掘立柱建物の中央の炉の内に火を焚いた跡があって、底の土が焼けていました。炉の周りの4箇所には穴がけられていまして、そのうち2箇所に大きなアスファルトの塊が残っていました(図22)。中で火をたいてとけてきたアスファルトを、接着剤にしているような作業をしていた様子が良くわかりました。アスファルト利用の作業場だったようです。

次は同町の豊崎N遺跡です。そこから出てきた土器に入れて運んだアスファルトです(図23)。アスファルトは盛んに運搬されて交易品になっていました。



図23 土器に入れて運ばれたアスファルト

次は青森市の小牧野遺跡です(図24)。なだらかな斜面ですが、径30mを越える範囲を深いところで2m近く掘り下げて、こちらの側の斜面の低い方に盛って広場を作り出していました。その次に、斜面に長楕円形の石を立てかけるように等間隔に置き、それを囲むように両側に数段石を横に積むように並べた小牧野型という石の組み方をしています。墓だと思われる石組みも含まれています(図25)。土地を造成するという意味では大変な土木工事をするわけです。小牧野のすぐ脇を流れている荒川という川に降りていって、川原の石を2,000個ほど山の上に運んで、さきほどの配石を作っている。土を動かす、石を動かす大土木工事をしていました。



図24 大土木工事で築かれた環状列石

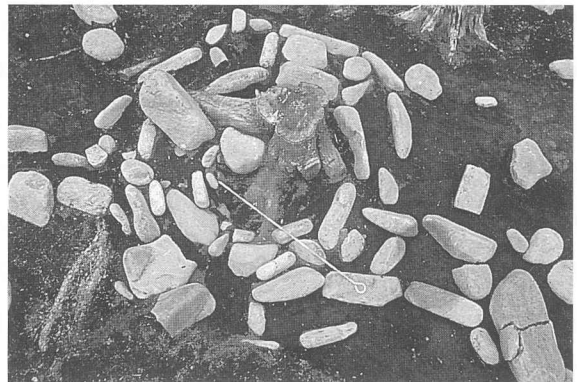


図25 環状列石に組み込まれた配石墓

次は群馬の矢瀬遺跡から出てきた絵を刻んだ石です(図26)。扁平な円礫に弓と矢をもつ人を描いています。縄文時代では非常に数少ない絵の一つです。縄文人は、狩りする姿とか魚を捕る様子だとか、あるいはシャーマンの姿などを、非常に数少ない例ですが、土器や石に描いています。これらが祭りの場所で使われたり、祈りの対象として使われたのだと思います。以上はしよった説明しか出来なくて恐縮です。

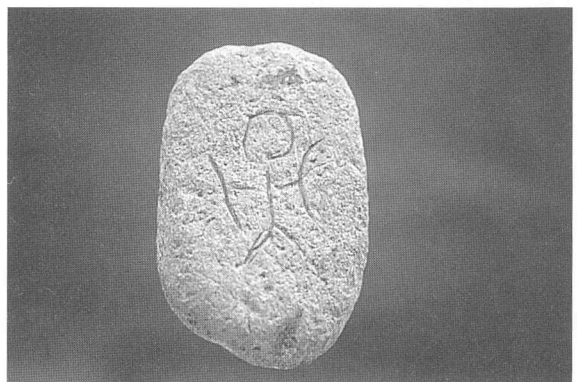


図26 弓をもった狩人が描かれた礫

今日どの辺の縄文時代観が新しく変わったかを説明しました。断片的な説明でトータルな説明は出来ませんでしたが、いかに工夫して定住生活を安定させていたかと言うことを中心にお話してきました。定住しながら1年2年3年先、もっと10年くらい先の自分たちの生活を予想して、いろいろに生活を工夫しています。今回触れませんでした。例えば漆器を作るには、漆の林を管理して、夏場に

漆を搔いて、それを精製して真夏の天日の下でくろめにする。一方では、伐っておいた木を冬、里に降ろして、それを木の器にあらかた加工して、水にさらして寝かしておく。仕上げ加工をして、漆を塗っていく。非常に時間のかかる一連の行程を頭に入れているわけです。クリにしてもクルミにしても何年先になったらちゃんとたわわに実をならすだろうと、そう言う数年がかりの生活の仕組みを頭に描きながら、自然ときわめて調和した生活を送っているのです。自然を伐り開きするけれども、出来るだけ自然の再生を願って自然と調和的に生活していただろう。それもたぶんそれぞれの地域に合った、例えば横手盆地だったら横手盆地に合った生活を1万年もかけて縄文時代に工夫し、完成させていたはずです。そういう意味では自然を非常に大事にして、自然の恩恵を受けてきたわけですから、自然の恩恵に感謝しながら、ゴミも自分たちの祖先もまた自然に返し、また戻ってきて恵みを与えてほしいと言うお祭りも盛んにしていたようです。今アイヌ民族が行っているような再生の儀礼、あるいは火を焚きながら、空に道具類をまき散らして呪文を唱えて地上に降りてくる間に、天に上ってきてまた再生して私たちに恵みを与えてくれるように祈ると言うような、北アジアに広く広がっている儀礼と共通するような送りの儀礼を、縄文人はたぶん生活に組み込んでいたのでしょう。自然を余すことなく非常に調和的に暮らして、ひとたび採った自然の物、動物にしろ鳥にしろいろんな物に感謝をして、再生を願ってあの世に返してあげる。自然物を非常に大切にするとことん使い切ると言う気持ちが伺えます。昔は、私たちの身の回りには自然に出来た物が沢山ありました。ところが今、自分の家を考えてみても、自然物を利用した物はまずありません。石もないですね。骨で作った道具と言っても前は匏なんかありましたが、今は鼈甲だって高くてもとてじゃないけど手が出ない。身の回りに自然物はほとんどありません。かつての日本人は自然物を大事にして、使い切ってから感謝の気持ちを込めてあの世へ返していた。和食だって基本的には大体ゆでて煮て食べるか、ごく一部生で食べる食べ方でしたが、これも縄文人が工夫して作った和食の原型でした。1万年の間に今の生活の基礎を縄文人は作っていて、それは日本の自然に非常に合っていた。どうも私の子供の頃の体験をさかのぼって行きますと縄文時代に行き着くことが多いような気がします。私は新潟の生まれです。付近の農家に行きますと家の台所まで小川の水を引っ張ってました。そこを水場にして米を研いだり茶碗を洗ったりしていました。自然と調和的な生活をしてた。それを今急激に忘れ去ろうとしている。一刻でも早く電車に乗って、電車も前の方に乗っていればあそこの駅は乗り換えで歩くのが短くてすむとか、そんなことばかり気にして時間に追われて生活している。ずっと縄文時代以来長いこと日本人の環境や生活に合わせて作り上げられてきた暮らしの原型が、今急激に亡くなろうとしています。ほとんど無批判に、亡くしているかどうかというのを考える暇もなく、亡くしているような気がします。あと100年先、200年先の考古学者や人類学者は、この今の時代はものすごく急激に変化した時代と特徴づけると思います。その前の時代の伝統を継承した最後を生きている私たちが、こういった選択で本当にいいのだろうか、そんなことも考えながら次の世代につなげていきたい。そういった意味で文化財の保護と活用が、住民の、広く国民の役に立てばいいなと思います。うまく伝えられませんでした。ご静聴ありがとうございました。

挿図出典

- 図1 新東晃一 「縄文時代のはじまり（南九州ルート）」 岡村道雄編『ここまでわかった日本の先史時代』
角川書店 1997(平成9年)
- 図2・3 岡田康博・NHK青森放送局編『縄文都市を掘る』 日本放送出版協会 1997(平成9年)
- 図4・5 金山喜昭 「文化財としての黒曜石」『月刊 文化財』7月号 第一法規出版 1988(昭和63年)
- 図6 秋田市教育委員会『秋田市上新城中学校遺跡』 1992(平成4年)
- 図7・8・9 青森県教育庁文化課三内丸山遺跡対策室提供
- 図10・11・12 筆者撮影
- 図13・14 大分県教育委員会提供
- 図15・16・17 東京都北区教育委員会提供
- 図18・19 財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター提供
- 図20・21・22・23・26 文化庁編『発掘された日本列島 '96 新発見考古速報』朝日新聞社 1996(平成8年)
- 図24・25 青森市教育委員会提供

(於：横手平鹿広域交流センター 平成9年3月9日)